

# 古民家新聞

匠を感じる住まい

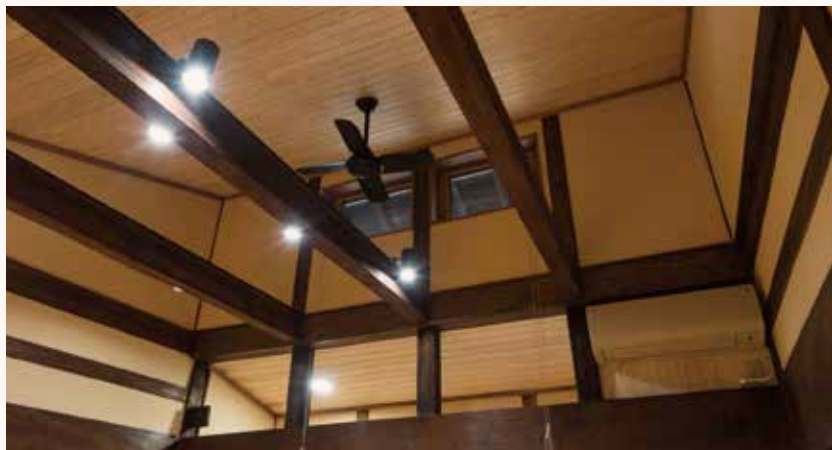
vol. 29

ひと雨ごとに秋の色が濃くなって参りました。

古民家の魅力のひとつに、太く立派な梁・柱があります。長年磨きこまれて出来た艶のある濃い茶色や、囲炉裏や台所の煙でいぶされて黒色になった梁・柱は、重厚感や歴史を感じさせいっそう古民家の魅力を引き立てています。

古民家のお手入れや改修の際、新しい木材の白木をそのまま使うか、古材の色に合わせて塗装するかはそれぞれの良さがあり、お好み次第です。長年かけてできた古材の色に、新しい木材を合わせようと思っただけは、何を使ってどう塗装したらいいのか意外と悩ましいポイントです。

そこで今回は新材を古材の色に合わせる方法を集めてみたいと思います。



## 本格派

古民家再生を本格的に！時間も手間もたっぷりかけて、古材と新しい木材の色を合わせていく方には、『オイルステイン+顔料の混合塗料、仕上げ材にワニス』を使う方法があります。オイルステインは内部用の水性木部塗料、顔料は粉を油でねったような着色料になります。古材のいぶされた色はすす煤などが木目に詰まってできたもの。顔料がその目の詰まり具合をうまく表現し、色に深みを出す役割をします。古民家再生の先駆者、建築家の降幡氏もこれに近い方法で色合わせを行っていたそうです。

まずはポイントとなる基準色の決め方。古材の表面を濡れ布巾で拭いたときの少し湿った色を基準色とし、この色の再現をめざします。こげ茶系のオイルステインに、赤・黒・黄色などの顔料を割りばしの先にほんのちよつとつけて色を調整していきます。そ

に、部屋全体を見直し色のバランスを取りながら塗っていきます。2つ目のポイントは、重ね塗りの利く薄い塗料から塗っていくことです。室全体の塗装が乾いて色の付き具合のバランスが良ければ、最後にワニスで色の固定を行って完成です。塗装屋さんでも4工程くらいをかけて行うそうなので、初めてやる方は実験が必要になりそうです。

## 自然塗料派

重要文化財の飛騨高山の下部民藝館の木部は、ベンガラにすす煤を混ぜて塗られているようです。ベンガラとは酸化第二鉄を主成分とする無機赤色顔料の一種で人類が使用した最古の顔料といわれています。

また、文化財の補修の際には、新しくする梁などをあら

## 既製品派

いままで出てきたものはどれも少しハードルが高い。そんな方には、既製品をうまく利用する方法があります。古民家再生をやられている方にどんな製品をつかっているか聞いてみたところ、「自然塗料いろは」「自然塗料プラネットカラー(艶消し)」「古色着然」等がありました。同じメーカーのものを2色購入し、混ぜて古材の色に近づけるのもおすすめです。仕上げに艶の欲しい方は仕上げにニス系のものを塗ってみてはいかがでしょうか。

## 特集!

# 古材風に塗装をするには

お問い合わせは

一般社団法人 三重県古民家再生協会

〒510-8016 三重県四日市市富州原町10-6 TEL059-366-3833 FAX059-361-1717 mail info@tap-s.com

kominka-mie.org